

中国湖南文理学院から茨大へ使節団 60人が交流をエンジョイ



中国・香港の北部の湖南省の中国湖南文理学院の大学生 36 名と教員 2 名で構成される使節団が 9 月 21 日午後、人文学部を訪問、図書館 1 階の共同学習エリアで、茨城大学の学生約 20 名と 1 時間半の交流会を楽しんだ。

交流会は、茨城県商工労働部観光物産課主催の教育旅行一環として企画され、人文学部の横溝ゼミの学生や留学交流課、中国が専門の井澤耕一教授、国際交流員会委員の付月准教授などの協力で開催された。



日中両言語が堪能な留学生で横溝ゼミのリウワンシエン（人文学部 4 年）の司会で交流会は、スタート。冒頭、人文学部の国際交流員会副委員長長木村昌孝教授が「国際的役割を担う両国の学生にとって有意義な交流となることを願う」と挨拶、これに対し、文理学院の梅暁勇副院長は、「茨城は湖南と似ているところが多い。交流ができることを光栄に思う」と応じた。これに続き、両大学の学生代表がパワーポイントを使ってそれぞれの大学を紹介。中国側からの質問に対しては、茨大生が答えた。

質問は、日本の食べ物や祭りから、職業観、理想の学生像および大学像に至るまで多岐に渡り、茨大生らは、「自分にとっても社会にとっても意義のある仕事がしたい」、「学生が主体となる活動を通して、これからも学んでいけたらいい」などと熱く語り、湖南文理学院生たちは、真剣に耳を傾けていた。



中盤からのグループに分かれて共通点を見つけるという交流ゲームの開始と同時に、場の空気が一変した。学生たちは、1 チーム 4 名、うち 1 名は茨大生の 12 チームに分かれ、ラーニングコモンズ（共同学習室）のあちこちに散り、チーム内の両国学生の共通点探しをした。

約束事として、どの言語あるいは非言語を用いてもよいが、コミュニケーションを図らないとわからないような共通点を挙げる。例えば、髪の毛が黒い、人間、といった外見でわかる共通点は得点としてカウントされないなどの条件が与えられた。

制限時間は 10 分間。ゲーム開始と同時に、各チームは、必死になってホワイトボードを共通点で埋め始めた。しばらくすると、ラーニングコモンズに笑い声が響き渡った。共

通点探しのコミュニケーションの中で、人間的な触れ合いが始まったのである。さらに、両国学生間の距離が身体的にも精神的にも縮まっていく様子うかがえた。

第1ゲームの優勝チームは27個の共通点、チーム替え後の第2ゲームでは57個もの共通点を見つけるチームも現れた。挙げられた共通点は、「バナナが好き」「ドラゴンボールが好き」といった食べ物や趣味に関するものから「恋人がいない」といったプライベートなことに至るまで様々。

盛り上がる交流会にもかかわらずバスの出発の時間はやってきた。締めくくりの挨拶として双方から、「配慮の行き届いた歓迎と交流会の盛り上がりで感動した。機会があれば、是非中国にも来てほしい」(梅副院長)、「茨城大学には様々な学部がある。日本で学びたい学生は、これを機に是非茨城大学に留学してほしい」(長谷川照晃留学交流課長)などのエールが交換された。



最後は、図書館前で、全員が記念撮影におさまった。バスに向かう道すがら、交流会で友情を深めた日中の学生らが、ポーズをとって、写真を撮り合い、別れを惜しむ姿があちこちで見かけられた。異文化コミュニケーションには、不可欠とされる直接接触の大切さが感じられた1時間半であった。

企画に当たった横溝環教員(異文化コミュニケーション担当)は、「開放的な空間で動き考えを共有していくことから、みるみるうちに距離を縮め、笑顔になっていく学生たちが眩しかった。多くの労力を企画・準備に費やしてくれた茨大生たちに感謝したい」と交流会の印象を振り返っていた。

(終)

